調査報告

端布からみた後藤家の衣服のあゆみ

舟山直治・尾曲香織・池田貴夫

キーワード　和装（Traditional Japanese costume）、和裁（Japanese dressmaking）、着物（Kimono）、生地（Fabric）、衣生活（Clothing habits）

はじめに

本稿は、道民・地域との協働・連携による地域情報集積プロジェクトの一環として、二〇一五（平成二七）年から五ヶ年計画で進めている「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」の調査報告である。調査の対象は、旧北海道開拓記念館（以下、記念館）が、一九九二（平成四）年の常設展示改定時に、衣服展示の時代考証をするための参考資料としていただいていたB5クリアファイルブックの布地帳（図版Ⅰ―1）である。

この布地帳には、明治生まれの故後藤シナ（一九〇四～一九九〇、以後シナと表記）の手で夫の故後藤邦義（一八九九～一九六九、以後邦義と表記）や子どもたちに向けて裁縫した生地の裁ち落としが、一三一枚の端布として収められている。これらの端布は、明治から昭和にかけての生地で、茶箱に保管されていた。シナの没後に遺品整理として、家族が一九九一（平成三）年に茶箱の端布を整理して、付箋（図版Ⅰ―2～3）に年代、布名、用途を一枚ごとに記してまとめたものである。いわば、この布地帳は、大正から昭和にかけてシナが裁縫した衣服などの生地見本となっている。

同様の布地帳は、江別市郷土資料館の「後藤邦之寄贈資料」計四五件の一つに、布地帳（図版Ⅰ―4～5、収蔵番号〇一四四五五）として収蔵されている。

本稿では当館の布地帳一三一枚の端布について、付箋の情報に模様や端布の大きさを加えて紹介するとともに、明治、大正、昭和の三期ごとに布名や用途を分類整理し、布地帳に収められた端布の特徴を明らかにする。さらに、日本において和装から洋装が広まる大正期以降において、家族の衣生活がどのようなあゆみをたどったのかを、裁縫で残された端布の情報と布地帳の製作者への聞き取りにより考察したい。

また、邦義が北海道庁に奉職した一九一六（大正五）年の日々をつづった「大正五年度日誌」（江別市情報図書館所蔵）の衣服に関する記述から、一九一六年における生地の購入と仕立て、衣替えや洗濯など、当時の独身男性の衣生活の状況を補足して、一九六五（昭和四〇）年頃までのおおよそ半世紀にわたる後藤家の衣生活の変遷を明らかにしたいと考える。

一　布地帳の調査概要

布地帳については、一九九二（平成四）年の記念館常設展示改定以降、二〇一五（平成二七）年の北海道博物館の開館の際に総合展示第三テーマの「三等客車」の乗客衣装をリニューアルにする際の時代考証のためにも活用している。「三等客車」は、暖房用の石炭ストーブを設置した客車のジオラマ展示で、農民、大工、杣夫、漁民、親子、老人、商人、官吏、女学生、小学生、中学生、軍人、車掌など一八体の人形を配置したものである。展示の目的は、ストーブや乗客の防寒着など北海道の冬のくらしの一端と、帽子、背広、制服、コート、革靴などから、全国的に洋装が浸透していく過程の風俗をあわせて紹介することにある。この大正年間（一九一二～一九二六）を想定した乗客の衣服、特に

舟山直治：北海道博物館　学芸部長
尾曲香織・池田貴夫：北海道博物館　研究部　生活文化研究グループ

女性の着物を考えるときに、明治から昭和にかけての家族の衣服の端布をまとめた後藤家の布地帳は、時代考証に極めて効果的な資料であった。このように二度の展示改訂に活用してきたが、布地帳の存在や資料的な価値をこれまで公開してこなかった。

筆者らは、「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」へ参加するにあたり、衣類の時代考証に有効であった布地帳を改めて公開することを考え、戦前から戦後にかけての衣生活の一つの事例を示すために調査を進めることとした。調査にあっては、二〇一八（平成三〇）年三月から布地帳の一三一枚の端布にある付箋の内容をエクセルデータとしてリスト化した。あわせて調査の事前作業として、画像データをスキャナーで取り込むとともに、端布を計測し、端布の大きさをデータに加えた。

同年四月には、一九九一（平成三）年の記念館資料情報処理票綴りをもとに資料の情報提供者で、布地帳の製作者でもある後藤正子氏（長男夫人）の連絡先を把握し、収蔵資料登録に向けて寄贈の意思確認を行った。この時、資料調査および収集の内諾を得るとともに、調査と並行して資料登録するため準備を進めることとした。

同年五月一〇日には、後藤正子氏宅において、同氏ともう一人の製作者である後藤道子氏（次男夫人）から、シナと邦義を中心に後藤家について、舟山、尾曲、池田の三名が聞き取り調査を行った。両氏の聞き取りにより、邦義関係資料は、北海道立図書館（以後、道立図書館と表記）のほかに、江別市郷土資料館（以後、郷土資料館と表記）と江別市情報図書館（以後、情報図書館と表記）にも収蔵されていることを確認した。あわせて、「葬儀司祭メモ」、「後藤シナ相続関係綴」、「後藤邦義資料目録（道立図書館）」、「道立図書館に寄贈した品々」（図版Ⅰ―6）、一九二一（大正一〇）年のシベリア出兵を記した邦義の日記を報道した新聞記事（図版Ⅰ―7）、額入りの押し絵（写真132）などを実見した。当該資料の撮影は池田が行った。さらに、同日には情報図書館において「大正五年度日誌」を閲覧している。しかし、日誌は字を崩しており、翻刻に時間を要することから、翌日に当館の図書室との図書館間の貸出の便宜を受けたうえで借用した。翻刻と記載内容の分析は、尾曲が担当した（註1）。

同年一一月三〇日には、当館の資料の登録作業を進めるため、資料情報処理票と資料審査票を提出した。翌月の一二月一九日には、館内の資料審査会に諮り、布地帳の受入の可否を審査し、収集することが認められた。

二〇一九年一月一一日には、布地帳の収集手続きのため、後藤正子氏から寄附申込書を受けとり、館内において資料調査収集報告書を提出した。また、同日には、後藤家で丹前（図版Ⅱ―1）、郷土博物館に寄贈されている後藤家の布地帳（図版Ⅰ―4～5）、衣類四点（図版Ⅱ―2～5）を、舟山と池田が分担して撮影した。

布地帳は、二月一四日に資料受払決定し、収蔵番号一八四八〇二番として登録した。

二　後藤家の家族について

シナの旧姓は辻で、父豊次郎と母モトの四女として、一九〇四（明治三七）年一月二五日に京都市上京区鞍馬口通寺町西入新御霊口町で生まれた。豊次郎は、一九一〇（明治四三）年に京都を転籍し、川上郡熊牛村字標茶を本籍地とした。シナは、一九一八（大正七）年に女学校を卒業し、一九二五年には後藤家に入籍している。シナは手先が器用で、家族の衣類をすべて裁縫したという。

邦義は、一八九九（明治三二）年に宮城県伊具郡丸森町で、貞吉ときよの四男として生まれ、一九一九（大正八）年には紋別郡上湧別村字白瀞で分家した。邦義は、一九一六年に北海道庁へ奉職し、一九二五年には辻シナと婚姻し、網走郡網走町大字北見町を本籍とした。

後藤夫妻は、一九二五（大正一四）年七月三〇日に第一子である故後藤邦之（一九二五～一九九九、以後邦之と表記）を網走で出産し、一九二七（昭和二）年には長女である故川村和子（一九二七～一九八七、以後和子と表記）、一九

三三（昭和八）年には帯広で次男孝夫氏（一九三三～、以後孝夫と表記）、一九四四（昭和一九）年には江差で次女である故池田淳子（一九四四～二〇〇二、以後淳子と表記）と、二男二女に恵まれている。

邦義は、道庁職員を退職後、一九四六（昭和二一）年に松川清江別町長が公職追放となった際に、助役として町長の代行を務めている（江別市、一九九五、一五〇頁）。さらに、邦義は、一九六九（昭和四四）年に没するまで江別市に居住していた。シナは、一九九〇（平成二）年に同じく江別市で没している。

三　布地帳について

布地帳の冒頭には、布地帳作成の趣旨書きが記されている（図版Ⅰ―2）。

後藤シナ所蔵品
布地のあゆみ（大正5年～昭和30年）
没後一周忌に茶箱の中に残された切地のみ整理しました。カビの処理、洗濯、アイロンかけ等、不十分ですが、とにかく年代順に収めてみました。
江別市野幌町市街佐藤呉服店社長に御指導いただきました。
1990年10月88才没
お裁縫がお上手で袴、留袖、全て手製でした。生涯和服で過されました。
30年以後の高度成長期の布地は含まれておりません。
1991年10月20日一周忌
後藤道子
正子

このように布地帳は、江別市在住の後藤正子氏と後藤道子氏が、義母であるシナの一周忌となる一九九一年一〇月二〇日に、茶箱に残されていたシナ所蔵品の端布を、カビ処理や洗濯アイロンかけなどを施して、丹念にまとめられたものである。布地帳をまとめる際には、江別市野幌駅前の佐藤呉服店（現在の佐藤洋品店）から教示を受け、生地の年代、布名、用途を付箋に記し、端布を収めたクリアファイルに貼り付けている（図版Ⅰ―3）。

一方、江別市郷土資料館蔵の布地帳（図版Ⅰ―4）にも、趣旨書き（図版Ⅰ―5）が次のように記されている。

布地のあゆみ
後藤シナ所蔵品（大正5年から昭和27年までの布）
没後、茶箱の中に残された切地をアルバムに収めました。
布銘柄は野幌市街佐藤呉服店社長に御指導いただきました。
更に情報図書館館長はじめ多くの方々にお知恵をおかり致しました。
厚く感謝申し上げます。
昭和30年以後、高度経済成長期
時代から平成のものは含まれておりません。
お裁縫がお上手で生涯和服で過ごされました。88才没
平成3年10月20日一周忌
後藤道子
正子

とあるように、何れもシナの一周忌に合わせて製作した布地帳である。この布地帳に整理された端布は、生涯和服を通したというシナが、夫や子ども達、そして自らに向けて裁縫してきた生地の裁ち落としであり、大正から昭和中頃までの六人家族の衣類のあゆみをたどることのできる貴重な資料といえる。

本稿では、既存の付箋に一番から一三一番まで番号を付した。次章において付箋に記されている年代、布名、用途の三件と写真をすべて掲載する。さらに、各付箋に記載された生地や模様について、それぞれの端布を検証し、模様など若干の補足と大きさを追記した。年代は、大きく明治、大正、昭和の三期に分

けられるが、付箋によると、大正が初期、中期、後期、昭和が初期・戦前、戦中・後期などの記載があるため、表1に三期の数値を細分して示した。

四　後藤シナ所蔵品「布地のあゆみ」

（一）　銘仙

年代　大正七年

布名　銘仙

用途　女学校卒業式着用

シナが女学校を卒業した一九一八（大正七）年に着用した着物である。模様は、黒地に菊花、葉、よろけ縞と、大きく三種の柄がある織物。端布の幅が六・七cm、長さが一三・五cm。一九番の生地と同じである。

写真1　銘仙

（二）　羽二重

年代　大正五年

布名　羽二重

用途　男性羽織裏

一九一六（大正五）年に入手した羽織の裏地である。別の付箋に、「絵師甚七」とある。紋様として、「宝づくし、富士、松と御所車の三種」と記されている。生地は、紺地、灰色地に格子、肌色地に宝船がプリントされている。宝船には、珊瑚、打ち出の小槌、宝鍵、巻物、七宝、犀角杯、稲穂がみられる。端布の幅が一七・三cm、長さが二四・九cm。一三一番目の富士に松とは柄違いではあるが、同一の生地である。付箋の年代から、「大正五年度日誌」で丸越呉服店から購入した羽織裏であるとしている。

写真2　羽二重

（三）　モスリン

年代　大正

布名　メリンス

用途　男性の襦袢

男性用の襦袢に用いた大正の生地。模様は、緑地に水盤、重鉢、木々、松皮文、亀甲文のほか、丸に「青々」がプリントされている。使用年代から邦義のものと考えられる。端布の幅が一六・八cm、長さが二一・八cm。

写真3　モスリン

（四）　縮緬

年代　大正

布名　小浜縮緬（ちりめん）

用途　戦後、染めかえ着物

この生地は、大正の生地を、戦後に染め変えたとある。模様は、草花など細かい模様が施されている。使用年代からシナ本人が用いたと考えられるが詳細は不明である。端布の幅が一七・三cm、長さが一七・一cm。

写真4　縮緬

（五）紅絹

年代　大正

布名　紅絹（モミ）

用途　裏地

着物の裏地に用いた大正の生地。赤無地の織物で、使用年代からシナ本人用と思われる。端布の幅が一八・二cm、長さが二二・七cm。

写真5　紅絹

（六）モスリン

年代　大正

布名　メリンス

用途　長襦袢

長襦袢に用いた大正の生地。生地は赤地に、流水、菊花、萩がプリントされている。使用年代からシナが用いたと思われる。端布の幅が一八・三cm、長さが二五・一cm。

写真6　モスリン

（七）モスリン

年代　大正

布名　メリンス

用途　襦袢

襦袢に用いた大正の生地。生地は、赤地に唐草と唐獅子、白地に唐草、白地に鱗文のパターン図がプリントされている。使用年代からシナが着用か。端布の幅が一八・五、長さが二五・〇cm。

写真7　モスリン

（八）羽二重

年代　大正

布名　羽二重（はぶたえ）

用途　男女兼用和服

男女兼用とした大正の生地。生地は茶地に、鱗と唐草が交互に連続して織られている。使用年代から後藤夫妻のいずれかが使用したと思われる。端布の幅が一七・五cm、長さが二一・二cm。

写真8　羽二重

（九）正絹

年代　昭和初期

布名　正絹

用途　袴（はかま）

袴に用いた昭和初期の生地。生地は、黒地に縦縞に織られている。年代と形態から邦義用のものと考えられる。端布の幅が一七・八cm、長さが二一・四cm。

また、別の付箋には、「昭和初期　袴　手製　後藤シナ作　没後江別市資料館寄贈」と記されている。郷土博物館の後藤コレクション四四点の内、袴は一件のみである（図版Ⅱ―2）。

写真9　正絹

（一〇）別珍

年代　大正

布名　ベッチン

用途　丹前襟（えり）

丹前の襟に用いた大正の生地。生地は深緑地に縦縞が織られている。一部に、使用痕や退色がみられる。使用年代から後藤夫妻のいずれかが着用か。端布の幅が一八・三cm、長さが二二・〇cm。

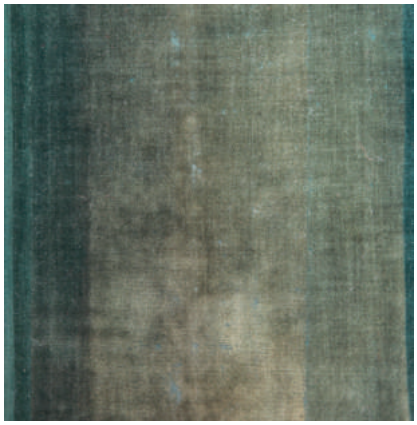

写真10　別珍

（一一）木綿

年代　大正

布名　木綿

用途　丹前

丹前に用いた大正の生地。生地は、茶地に縞に織られている。使用年代から後藤夫妻のいずれかが着用。端布の幅が一八・五cm、長さが二四・五cm。

写真11　木綿

（一二）紬

年代　大正

布名　大島

用途　街着（男性用）

男性用の日常着に用いた大正の生地。茶地に小紋の織物。使用年代から邦義が着用か。端布の幅が八・七cm、長さが一八・六cm。

写真12　大島

（一三）モスリン

年代　大正

布名　メリンス

用途　着物（男性）

男物着物に用いた大正の生地。濃茶地に格子の織物。使用年代から邦義のものか。端布の幅が八・七cm、長さが一八・六cm。

写真13　モスリン

（一四）セル地

年代　大正

布名　セル

用途　綿入れの袢纏

綿入れ袢纏に用いた大正の生地。生地は、濃茶に格子柄に織られている。使用時代から後藤夫妻のいずれかが着用か。端布の幅が一三・八cm、長さが二一・三cm。

また、別の付箋に、「1991年11月に、江別市資料館寄贈　70年前手製」とある。後藤コレクションには、この生地の袢纏がある（図版Ⅱ―3）。

写真14　セル地

（一五）羽二重

年代　大正

布名　羽二重（はぶたえ）

用途　留袖の長襦袢

留袖の長襦袢に用いた大正の生地。生地は、赤地に鳳凰の透かし織りとなっている。使用年代と色柄からシナ本人用と思われる。端布の幅が一六・三cm、長さ二二・五cm。

写真15　羽二重

（一六）縮緬

年代　明治

布名　小浜縮緬（ちりめん）

用途　戦後染めかえ

明治の小浜縮緬で、戦後に染め変えたという。用途は記載無し。生地は、ピング地に波の連続文である。明治の古着を染め直したもの。使用年代からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一四・五cm、長さが二三・三cm。

写真16　縮緬

（一七）紬

年代　大正

布名　大島

用途　羽織

羽織に用いた大正の大島紬。生地は、深緑地に、色違いの花状の柄が織られている。使用年代と柄からシナが着用したと思われる。端布の幅が一三・八cm、長さが二一・三cm。

写真17　紬

（一八）紬
年代　大正
布名　大島
用途　和服
和服に用いた大正の生地。生地は、濃い焦げ茶地で、松皮菱に織られている。使用年代と柄からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一八・五cm、長さが二三・四cm。

写真18　紬

（一九）銘仙
年代　大正
布名　銘仙
用途　女学校卒業式着用
一番と同じで、シナが女学校を卒業した一九一八（大正七）年に着用した着物に誂えた生地である。この生地は、黒地に菊花、葉、よろけ縞と、大きく三種に織られている。幅一七・八cm、長さ一七・八cm。

写真19　銘仙

（二〇）銘仙
年代　大正
布名　足利銘仙
用途　和服
和服に用いた大正の生地。産地が足利という。生地は、黒地に桔梗柄に織られている。使用年代と柄からシナが着用したと考えられる。幅一七・〇cm、長さ二〇・九cm。

写真20　銘仙

（二一）銘仙
年代　大正
布名　銘仙
紋様　家屋紋（着物）
着物に用いたという大正の生地。また、紋様は、家屋紋であるとし、松皮菱のような屋根と煙突屋根の連続柄に織られている。使用年代と柄からシナが着用したと考えられる。幅一七・九cm、長さ二二・〇cm。

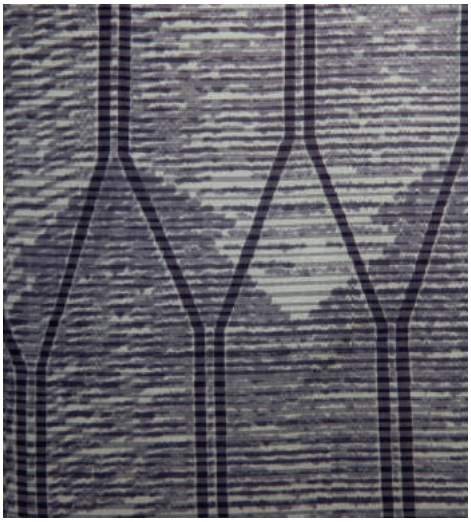

写真21　銘仙

（二二）銘仙
年代　大正
布名　銘仙
用途　着物
大正の着物用。生地は、焦げ茶地に蔦と樹皮模様がプリントされている。使用年代と柄からシナが着用か。端布の幅が一七・〇㎝、長さが二二・四㎝。

写真22　銘仙

（二三）銘仙
年代　大正
布名　足利銘仙
用途　街着
大正の足利銘仙で、街着用の生地。生地は、濃紫地で、水面の魚群が織られている。使用年代と柄からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一六・五㎝、長さが二二・三㎝。

写真23　銘仙

（二四）銘仙
年代　大正
布名　足利銘仙
用途　外出着
街着用の着物に用いたという大正の生地。生地は、紺地で、花（詳細不明）と唐草が織られている。使用年代と柄からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一七・〇㎝、長さが一八・〇㎝。

写真24　銘仙

（二五）銘仙
年代　大正
布名　銘仙
用途　着物
着物に用いた大正の生地。生地は、濃焦げ茶地に縞模様が織られている。端布の幅が九・五㎝、長さが二三・八㎝。

写真25　銘仙

（二六）紬
年代　大正
布名　むらやま大島
用途　街着
街着用の着物にあてた大正頃の生地。生地は、濃い茶地で、よろけ菱内に椿や網代などが織られている。使用年代と柄からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一三・八㎝、長さ一七・三㎝。

写真26　大島紬

（二七）モスリン
年代　大正
布名　メリンス
用途　一重着物
単衣に用いたという大正の生地。生地は、青地に鱗柄がプリントされている。使用年代と柄からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一六・三㎝、長さ二〇・五㎝。

写真27　モスリン

（二八）モスリン
年代　大正
布名　メリンス
用途　一重着物
単衣に用いた大正の生地。藍地に菱と格子の絞り染め風にプリントしている。使用年代と柄からシナが着用か。端布の幅が八・七㎝、長さが一八・六㎝。

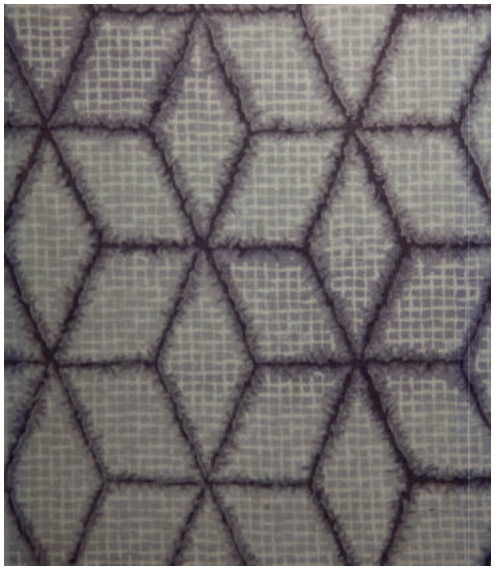
写真28　モスリン

（二九）セル地
年代　大正
布名　セル
用途　女学校通学着用
大正の生地で、シナの女学校時代、通学時の着物として用いられたという。生地は、薄紫地に濃淡の縞模様が一つ置きに織られている。端布の幅が一八・三㎝、長さが二三・一㎝。

写真29　セル地

（三〇）セル地
年代　大正
布名　セル
用途　もんぺ上下外
大正頃の生地で、もんぺの上下外地に用いた。生地は、藍地に六種の縞が織られている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。幅が一七・五㎝、長さ二二・一㎝。

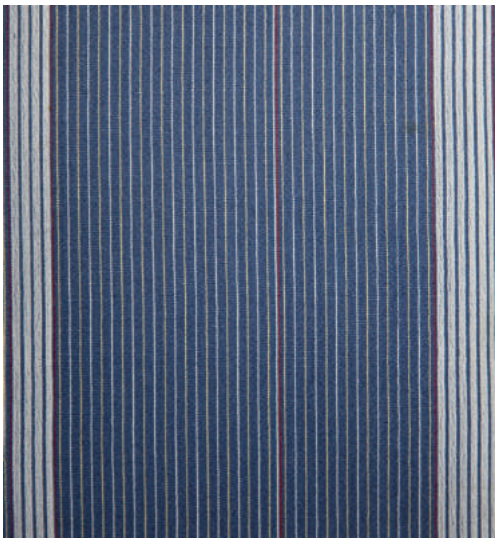
写真30　セル地

（三一）モスリン
年代　大正
布名　メリンス
用途　長襦袢
大正の生地で、長襦袢に用いたという。生地は、白地に唐草と赤の蝶が絞り風にプリントされている。使用年代と柄からシナが着用か。幅が一七・二㎝、長さ二三・七㎝。

写真31　モスリン

（三二）モスリン
年代　大正
布名　メリンス
用途　長襦袢
大正の生地で、長襦袢に用いたという。生地は、白地に花（詳細不明）の絞り風にプリントされている。使用年代と柄からシナ本人用の生地と考えられる。端布の幅が一六・二㎝、長さが一七・二㎝。

写真32　モスリン

（三三）紬
年代　大正
布名　むらやま大島
用途　道行コート外
大正の道行コートの外地に用いたという。茶地に、菱目の連続で、菱目の中に三種の模様に織られている。使用年代からシナ本人の道行きと考えられる。端布の幅が一七・五㎝、長さ二一・〇㎝。また、別の付箋に、「没後一周忌に江別市資料館に寄贈　裏地にロンドン橋の紋様有り」と、江別市郷土資料館に道行がある（図版Ⅱ―4）。

写真33　紬

（三四）銘仙
年代　大正
布名　銘仙
用途　羽織

大正の生地で、羽織に用いたという。模様は、青地に矢羽根柄に織られている。また、別の付箋によると、「没後一周忌に江別市資料館に寄贈　大正12年結婚、嫁入り持参」とあるように、江別市郷土資料館に羽織（図版Ⅱ―5）がある。使用年代と柄からシナ本人用の生地と考えられる。端布の幅が一六・五cm、長さが二三・〇cm。

写真34　銘仙

（三五）銘仙
年代　大正
布名　ガス銘仙
用途　ねんねこ外

大正の生地で、ねんねこの外地として用いられた。生地は黒地に、桐の葉柄に織られている。使用年代と柄からシナ本人用の生地と考えられる。端布の幅が一七・三cm、長さが一七・五cm。

写真35　銘仙

（三六）富士絹
年代　大正一四年
布名　富士絹
用途　男児一つ身

付箋に大一四（一九二五）年とあることから、長男邦之が生まれた際に繕った一つ身。一つ身は、布一枚で後ろ身頃を仕立てた乳児用の着物で、背面中央の背縫いがない。青地に波と帆掛け舟、石畳、丸に鶴と丸に宝袋がプリントされている。端布の幅が一七・八cm、長さが二四・五cm。

写真36　富士絹

（三七）モスリン
年代　大正一四年
布名　メリンス
用途　男児用布団の鏡

長男邦之が生まれた大正一四年に、布団の鏡とした生地。青と白の市松模様。青地には兎と亀に日の丸、白地には井桁と四つ星をプリントしている。端布の幅が一八・三cm、長さが二四・五。

写真37　モスリン

（三八）モスリン
年代　大正一四年
布名　メリンス
用途　男児用布団額縁
大正一四年に長男邦之が生まれた年に誂えた布団生地。緑地に織られている。端布の幅が一四・〇cm、長さが二二・九cm。

写真38　モスリン

（三九）富士絹
年代　昭和二年
布名　富士絹
用途　女児四つ身
長女和子が生まれた昭和二年に誂えた四つ身の生地。四つ身は身丈の四倍の長さで見頃を裁ったもの。青地に檜扇、唐草、菊、竹垣、松、竈などの柄がプリントされている。端布の幅が十三・七cm、長さが二四・〇cm。

写真39　富士絹

（四〇）モスリン
年代　昭和
布名　メリンス
用途　四つ身裏と紐
昭和の四つ身の裏地。桃色地。年代と用途から和子か淳子の四つ身の裏地と思われる。端布の幅が一七・五cm、長さが一五・九cmと、幅が一四・〇センチ、長さが八・二cmの二枚。

写真40　モスリン

（四一）モスリン
年代　昭和八年
布名　メリンス
用途　男児用一つ身
付箋に昭和八（一九三三）年とあることから、次男の孝男が生まれた際に誂えた一つ身といえる。黒地に武者絵と松などがプリントされている。端布の幅が一八・二cm、長さが二三・〇cm。

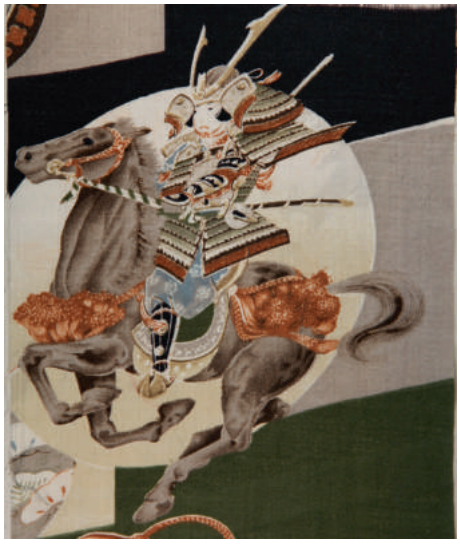
写真41　モスリン

（四二）羽二重
年代　昭和
布名　羽二重
用途　裏地
昭和に着物類の裏地に用いた生地。使用者と何の裏地かは不明。平織り、緑地。端布の幅が一六・三cm、長さが二二・八cm。

写真42　羽二重

（四三）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　着物
昭和初期に着物に誂えるために用いた生地。年代からシナ用と考えられる。青地に立湧文と蔓草がプリントされている。端布の幅が一六・三cm、長さが二二・三cm。

写真43　モスリン

（四四）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　着物
昭和初期の着物地。青地に棒柵がプリントされている。使用年代や柄からシナの着物生地と考えられる。端布の幅が一七・三cm、長さが二〇・〇cm。

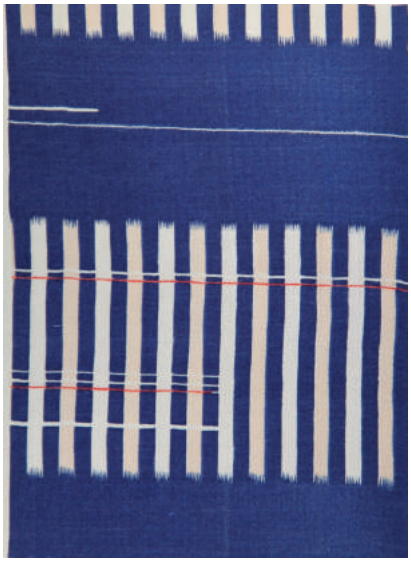
写真44　モスリン

（四五）モスリン
年代　昭和
布名　メリンス
用途　着物
着物に用いた大正の生地。灰黄色地に唐草がプリントされている。使用年代や柄からシナ本人の着物生地と考えられる。幅が一六・五cm、長さが二〇・二cm。

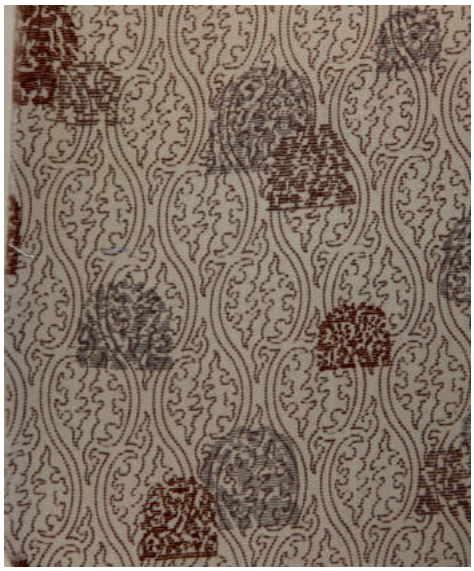
写真45　モスリン

（四六）モスリン
年代　昭和
布名　メリンス
用途　着物
着物に用いた昭和の生地。生地の模様は、白地に格子柄をプリントしている。使用年代からシナ本人の着物生地と考えられる。端布の幅が一七・〇cm、長さが二二・二cm。

写真46　モスリン

（四七）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　着物
昭和初期の着物生地。模様は、茶地に唐草をプリントしている。使用年代や柄からシナ本人の着物生地と考えられる。端布の幅が一五・五cm、長さが二四・三cm。

写真47　モスリン

（四八）正絹
年代　昭和初期
布名　しぼり正絹
用途　着物
昭和初期の着物生地。模様は、紺地に朝顔の絞り染め。使用年代や柄からシナ本人の着物生地と考えられる。端布の幅が一七・八cm、長さが一九・二cm。

写真48　正絹

（四九）八端
年代　昭和初期
布名　はったん
用途　和服
昭和初期の着物生地。模様は、紺地に縞模様に織られている。使用年代や柄からシナ本人の着物生地と考えられる。端布の幅が一七・一cm、長さが二一・八cm。

写真49　八端

（五〇）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　女児着物、後・長襦袢
昭和初期の女児着物で、後に長襦袢とした生地。模様は、灰と紺地に、八重桜と掛け矢がプリントされている。使用年代や柄から和子の着物生地と考えられる。端布の幅が一四・〇cm、長さが二三・二cm。

写真50　モスリン

（五一）羽二重
年代　昭和初期
布名　羽二重（はぶたえ）
用途　長襦袢のお袖
昭和初期の長襦袢の袖とした生地。模様は、朱、紫、薄緑地に、紅葉と松葉がプリントされている。使用者および組合わせの長襦袢は不明。端布の幅が一六・六cm、長さが二三・六cm。

写真51　羽二重

（五二）富士絹
年代　昭和初期
布名　富士絹
用途　羽織の裏地
昭和初期の羽織の裏地に用いた生地。模様は、肌色と緑地に、流水、菊、桔梗がプリントされている。使用年代や柄からシナ本人用の生地と考えられる。端布の幅が一六・六cm、長さが二四・五cm。

写真52　富士絹

（五三）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　一重夏物
昭和初期の単衣に用いた生地。模様は、薄青地に竹垣と唐草がプリントされている。使用年代や柄からシナ本人用の生地と考えられる。端布の幅が一六・六cm、長さが一八・〇cm。

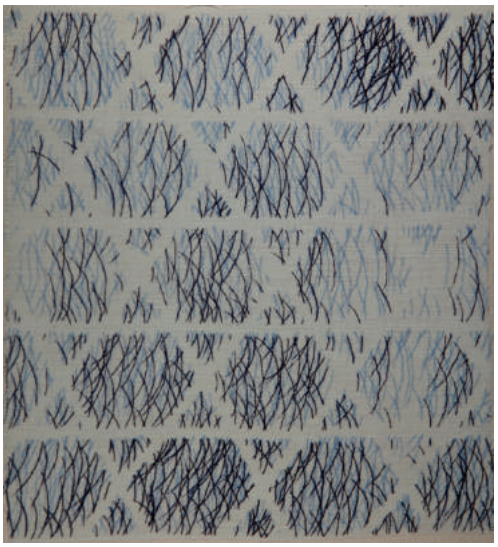
写真53　モスリン

（五四）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　夏物
昭和初期の夏物の生地。薄紫地に花（菖蒲）がプリントされている。使用年代や模様からシナ本人の夏物の衣服に用いた生地と考えられる。端布の幅が一六・五㎝、長さが一七・八㎝。

写真54　モスリン

（五五）モスリン
年代　戦前
布名　メリンス
用途　帯
昭和初期の帯の生地。薄い橙色地に、宝相華がプリントされている。使用年代や模様から和子の帯に用いた生地と思われる。端布の幅が一七・八㎝、長さが二四・八㎝。

写真55　モスリン

（五六）絽
年代　大正
布名　絽
用途　夏帯
大正の夏帯の生地。白地にアザミがプリントされている。使用年代や模様からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・八㎝、長さが二四・八㎝。

写真56　モスリン

（五七）モスリン
年代　大正
布名　メリンス
用途　長襦袢
長襦袢に用いた大正の生地。白地に梅、桜、唐草、巴文がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一四・二㎝、長さが一七・〇㎝。

写真57　モスリン

（五八）モスリン

年代　大正

布名　メリンス

用途　着物

大正の着物の生地。紺地に牡丹、梅、菊、唐草文がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一五・一cm、長さが一七・一cm。

写真58　モスリン

（五九）不明

年代　昭和初期

布名　不明

用途　帯（ミシン刺繍）

昭和初期の帯の生地。布名不明。生地には、露草や短冊がミシン刺繍されている。使用年代と模様からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・〇cm、長さが二三・七cm。

写真59　不明

（六〇）正絹

年代　昭和

布名　正絹

用途　半えり

昭和の半襟の生地。白地に雲文の透かし織り。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・三cm、長さが二二・四cm。

写真60　正絹

（六一）綸子

年代　昭和

布名　紋綸子（もんりんず）

用途　コート裏地

昭和のコートの裏地。桃地に縞の透かし織りとなっている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・五cm、長さが二一・二cm。

写真61　綸子

（六二）絽
年代　昭和
布名　絽
用途　夏物襦袢
昭和の夏物襦袢の生地。白地に縮み織りとなっている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・二cm、長さが二〇・二cm。

写真62　絽

（六三）富士絹
年代　昭和
布名　富士絹
用途　女学生晴着
昭和の女学生の晴れ着。緑地に梅、桜、松、竹、流水などがプリントされている。使用年代と用途から和子が着用したと思われる。端布の幅が一七・〇cm、長さが二一・八cm。

写真63　富士絹

（六四）錦紗
年代　昭和
布名　錦紗（きんしゃ）
用途　女児晴着
昭和の女児の晴れ着に用いた生地。薄い橙地に、唐草、八重桜、菊花のほか絞り風にプリントされている。使用年代と用途から和子か淳子が着用したと思われる。端布の幅が一八・二cm、長さが二二・四cm。

写真64　錦紗

（六五）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　和服日用着
昭和初期の日常着用の生地。紺地に絞り染め風にプリントされている。使用年代と用途からシナが着用か。端布が二枚縫い合わせで最大幅一一・一cm、長さが二三・四cm。

写真65　モスリン

（六六）正絹

年代　昭和初期

布名　正絹しぼり

用途　羽織

羽織に用いた昭和初期の生地。生地は、紫地に、梅と小紋の絞り染め。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・五㎝、長さが一七・六㎝。

写真66　正絹

（六七）人絹

年代　昭和初期

布名　人絹（じんけん）

用途　羽織

昭和初期の羽織の生地。灰地に薔薇とよろけ格子がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・三㎝、長さが二二・一㎝。

写真67　人絹

（六八）羅

年代　大正

布名　羅（ら）

用途　夏物

夏物に用いた大正の生地。紺地に菊が織られている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・八㎝、長さが二一・六㎝。

写真68　羅

（六九）正絹

年代　大正

布名　正絹（男性用）

用途　夏用襦袢のお袖

大正の夏期の襦袢袖に用いた生地。灰地に、濃淡の縞に織られている。使用年代と用途から邦義が着用したと思われる。端布の幅が一六・五㎝、長さが二二・〇㎝。

写真69　正絹

（七〇）羽二重

年代　大正

布名　羽二重（はぶたえ）

用途　男性用八掛

付箋に八掛とあることから、大正の長着裏の裾取りに用いた生地。緑地。使用年代から邦義が着用したと考えられるが、合わせた長着は不明。端布の幅が一五・三cm、長さが一八・五cm。

写真70　羽二重

（七一）モスリン

年代　大正

布名　メリンス

用途　着物

大正の着物の生地。青地に縞と菱の小紋がプリントされている。使用年代と柄からシナが着用したと思われる。端布の幅が一五・七cm、長さが二一・八cm。

写真71　モスリン

（七二）モスリン

年代　大正

布名　メリンス

用途　襦袢

大正の着物の生地。灰地に桜、蝶、松、小紋がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一五・三cm、長さが一九・五cm。

写真72　モスリン

（七三）富士絹

年代　大正

布名　富士絹

用途　襦袢のお袖

襦袢袖に用いた大正の生地。薄緑地に葉脈と小菊がプリントされている。使用年代と柄からシナが着用したと思われる。端布の幅が一八・五cm、長さが二三・三cm。

写真73 富士絹

（七四）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　女児着物
昭和初期の女児の着物に用いた生地。白地に桜、松、竹、牡丹、蝶などがプリントされている。使用年代と用途から和子が着用したと思われる。端布の幅が一七・八cm、長さが二四・五cm。

写真74　モスリン

（七五）モスリン
年代　昭和初期
布名　メリンス
用途　女児着物
昭和初期の女児の着物に用いた生地。朱に染まった生地にプリントされている。使用年代と用途から和子が着用したと思われる。端布の幅が八・三cmと八・五cm、長さが二〇・五cmと二二・四cm。

写真75　モスリン

（七六）モスリン
年代　昭和戦前
布名　メリンス
用途　帯
昭和戦前の女児の着物に用いた生地。宝相華がプリントされている。使用年代と用途から和子が着用したと思われる。端布の幅が一四・三cm、長さが二一・四cm。

写真76　モスリン

（七七）正絹
年代　大正初期
布名　正絹
用途　女児三尺
付箋によると、大正初期の女児の三尺帯に用いたという。市松など透かし織りとなっている。年代は合わないが、用途から和子が着用したと思われる。端布の幅が一七・五cm、長さが二四・一cm。

写真77　正絹